



愛と死のスラローム 生田直親



講談社

生田直親

昭和4年東京生まれ。「判決」「土曜日の女」ほか多くのテレビドラマのシナリオを執筆し、昭和38年「煙の王様」で文部大臣賞受賞。その後、長野県上田市に居を移しスキー三昧に没りながら、ユニークな推理小説を次々に発表している。主な作品に「誘拐一九七〇年」「東京大戦争」「死の大滑降」

愛と死のスラローム

第1刷発行 昭和51年1月24日

著者 生田直親（いくた・なおちか）

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社上島製本所

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© NAOCHIKA IKUTA 1976 Printed in Japan

定価はカバーに表示しております。(文)



愛と死のスラローム 目次

PROLOGUE	5
BLOCK I 愛のはじめのエスケープ	23
BLOCK II 愛に流れるヴァガボンド	141
BLOCK III 愛の終りのレキューイエム	267
EPILOGUE	337

装画 安久利徳

装幀 渡辺裕二

愛と死のスラローム

PROLOGUE

一月十八日、午前零時すぎ。

菅平スキー場の、D ロッジの食堂は、すっかり灯を落としていた。

だが、三方を総ガラスにした室内は、満月にちかい月光と雪の照りかえしで、ほの明るく、数组のテーブルと椅子を浮かびだしていた。

一隅の壁にテレビがあつて、その下に休憩用のソファがある。そのうえでいま、一對の男女が、仔犬のようにたがいの体を舐めあつていた。

「周ちゃん、くすぐったい」

「ばか、すぐに感じるようになるさ」

「あたしのバスト、どう？」

「ああ、サイコーだよ」

「ほんと？ オタエのより立派？」

「ぜーんぜん」

「そこいや、恥しいもん」

「子どもみたいなこと言うなよ、いい歳して」

「オタエとは、どこまで行ったの？」

PROLOGUE

「気にするなって、あんな不細工」

「だってえ、周ちゃん、だれにでもこんなことするのかと思って」

「ほか、モモだけさ」

「ほんとに？」

「ほんとにきまってるじゃねえか。感じるかい、どう？」

「うん、なんとなく、でも」

「でも？」

「でも怖い」

「遅れてんだよ、モモは。もっと力をぬけたら」

「だめ」

「だいじょうぶだよ、どうってことないさ」

「痛いわ、周ちゃん」

「だんだんよくなるって……女の体は、そういうものなんだ」

「ほんと？」

「ほんとさ。週刊誌に書いてあった」

「でも、もっとやさしくして」

「どうかい？」

「うん、感じてきたわ、ほんとに」

とつぜん、電気が点いた。

ふたりは、ふりかえって眼をみはった。男のほうは、まだおさな顔ののこる初々しい顔を十分に雪で灼き、のびのびとした四肢の青年だった。一方は、ぼってりした色白で、愛嬌のある表情の、発育のいい少女。どちらも宿の丹前婆だが、前がはだけていた。女の子は、熟れきったようなバストを灯にさ

らし、あわてて前をかきあわせた。

ふたりの視線の先に、食堂と各部屋をつなぐ通用口があつて、電氣のスイッチをいれた丹前姿の女の子と、まるでセントバーナードのような体格の男の子が立ちはだかつていた。女の子の眼には、青い焰が燃えているようだった。

つかつかと、ソファのところにかづくと、そのしたに落ちていた、女もののちいさな下穿したはきをスリッパの底で踏みにじった。

そしてモモと呼ばれた女の子に、

「卑怯ひきょうモン！」

といきなり唾を吐きかけ、平手うちした。

「なにするんだオタエ」

周ちゃんと呼ばれた男の子が、ぶたれた女の子をかばった。

「なにがなによ。モモのやつ、夜半にそっと布団をぬけだしてゆくから、あとを跟つけてきたらやっぱりそうじゃないの。だからキャプテンを呼んできたんだわ」

「シュウ、おまえどういうつもりだ」

セントバーナードのキャプテンもちかづいて、吠えた。「合宿中だぞ。あしたは野沢南高との対抗試合だつてのに」

「嫉やくなよキャプテン」

シュウこと城所周二郎がうそぶいた。「恋愛は自由だろ？ キャプテンだからって、そこまで文句いう筋合はねえと思うな」

セントバーナードの宮内順司のゴジラのような顔がゆがんだ。彼の、モモという女の子を見る眼には、もの悲しい恨みがあつた。

「なにが恋愛は自由よ」

オタエ、すなわち真船妙子が周二郎にくってかかった。「自由ってのは、手あたり次第に女の子に手をだすことじゃないはずよ。……ひどいじゃない、あたしにもあんなうまいことを言っといて」

「オタエ、そっとコーチを呼んでこい」

順司は妙子にそう耳うちしてひきかえさせると、強いてじぶんを落ちつかそうと深呼吸をしてから、「シュウ、おまえがどう言い訳しよう、おれは立場上、見逃がせんぞ。スキー部として、なんらかの処置をとるからな」

「謹慎か、退部か？」

周二郎は、笑った。「どっちにしても、おれがでなけりや、あしたの試合は、上田北高のザンバイだよな」

「だまれ！」

順司の罵声ばせいとともに、拳こぶしが飛んだ。

周二郎の細い体はじけ飛んで、音たてて床に転がった。

「このう」

周二郎は、床に落ちていた火デかき棒きをにぎって立ちあがった。

「やるか」

と順司も身がまえた。

モモ、伊藤桃子がその胸にとびこんだ。

「キャプテン、やめて、お願い」

「どけモモ」

周二郎が怒鳴どなった。唇が切れて血が糸をひいている。「たたきのめしてやる。キャプテンだなんてのさばりかえって、監督にゴマばかりすってやがる、くそゴジラめ」

デレキをふるって殴りかかった。

順司は、とっさにかたわらの椅子をとって、鉄の棒をうけとめた。木の椅子は一撃で碎かれ、デレキの先端が、順司の額をかすめた。そこから血が飛んだ。

「やめろ、周二郎……！」

通用口からとびこんだ男が、なおもデレキをふりかぶる周二郎にとびついた。

「兄貴か」

周二郎の手から、力がぬけた。

二歳上の太一郎は、上田北高の二年先輩だが二浪して長野の予備校通いをしている。在校中、上信越地区の高校三冠王をとったほどアルペンに強く、監督の懇望でスキー部のコーチとして合宿入りしていた。

「試合の前夜だったのに、なんのさまだ」

「べつに」

周二郎は、癪性なくせに、不思議と兄の太一郎には従順だった。「おれは、モモとちょっとなにしてただけなんだけど……売られたケンカだよ」

「口答えるな。高三のヒヨコの分際で、女の子ばかり追いかけて」

太一郎は、まっ黒に雪灼けた精悍な顔を、順司に向けて、「おいゴジラ、傷はだいじょうぶか」

「はあ、かすり傷です」

「腹も立つだろうが、シュウの処分は試合後にしてくれ。目標はインターハイだが、野沢南高を倒すのが第一段階だ。なんとしても勝ちたいからな」

「わかりました」

「モモ、それからオタエ」

太一郎は、女の子たちにも表情を強くして、

「おまえたち同好会が、サポートするんじゃないかって夜遊びにきたんなら、とっとと帰ってくれ」

「すいません」

と桃子がちいさな声で頭をさげた。

「じゃ、ゴジラもシェウも早く寝ろ。あしたは早いぞ」

そう言うところ、通用口のところにもうひとり、騒ぎを聞きつけて、心配そうに顔をだしているマネージャーの小野川奈美を認め、

「ナミ、おまえまでうろろろすることはしない。女どもを早いところ寝かしつけるんだ」

言いすて太一郎は奥に消え、奈美もそのあとを追った。

「ふん、コーナだってえらそうなこと言えたがらか」

妙子が、通用口のほうに、あかんべえをした。「蔭でこそこそ、ナミのやつといいことやってるくせに」

通りかかった周二郎の平手うちが、いきなり妙子の頬で鳴った。

「兄貴の悪口はよせ」

その語調のはげしさに、ぶたれた妙子が、きょとんと奇異のまなこを開きっぱなしだった。

翌朝は、濃霧が深かった。

マネージャーの小野川奈美は、七時すぎに眼をさました。ゆうべの騒ぎで、思わず寝すごしてしまったのである。

洗顔に階下においてゆくと、監督の沢田が赤電話をかけていた。

「まあ、多少風が出れば、濃霧も吹っとぶと思いますかね。はあ、一応十時スタートの線で準備にかかりましょうか。じゃあ、いづれ天狗で、失礼します」

沢田は受話器をおいた。

昨夜、団体バスでE荘に入った、スキーの名門野沢南高の監督と連絡したのだろう。

奈美は、歯ブラシを使いながら訊いた。

「監督、この天気でも決行ですか？」

「一応、その予定ですすめてくれ。場所は天狗ゲレンデだ」

そう言つて、奈美のかたわらで、ザブザブと顔を洗ひだした。「ゆうべ、なんか騒ぎがあったらしいな」

「さあ」

奈美はとぼけた。沢田は生徒の問題に首をつっこむような下手なことは、ぜったいにしない。渾名がローカイ、老獺なのである。

「おっと、手拭い、手拭い」

眼をつぶつたまま、棚においた手拭いを捜すふりをして、奈美のヒップにちょっと触ったりする。これだから嫌われるのだ。

試合決行となると、マネージャー兼サポーター兼トレーナーみたいな奈美は、てんてこ舞いに忙しい。ローカイ監督なんぞ、かまっていられない。

オタエやモモ、そのほかの同好会の女子をせきたてて、大急ぎで朝食をすますと、ゼッケンの整理、眼鏡の曇りどめにする石鹼水づくり、懐炉の支度、紅茶をつくつて魔法瓶につめる。サンドイッチを注文し、水も用意する。救急箱の中をあらためる。ほどなく上田市からの団体バスが着き、応援団を先頭に、どっとおりたつた北高の学生と、選手の父兄を大広間に案内して、茶菓の接待をする。

一方、六時にたたき起こされた男女二十名の正選手と五名の補欠は、城所コーチを先頭に、掛け声をかけて四キロを走りこみ、柔軟体操ののち朝食をとる。選手にえらばれなかった、主として一年生の部員は、この間、選手たちのイタに鈍をかけたたり、サンドペーパーをかけたり、縁刃をオイルストーンで磨きあげたり、汗だらけで忙しい。そこに朝食をすました選手たちがやってきて、各自工夫のワックスを、混合して塗りあげる。

「ワクシングを終ったものから、竹竿と塩を持って出発しろ」

城所コーチが指図する。「二応、十時開始の予定だから、それまでフリーで流せ。ただし、ポールをぐるぐるイメージで滑るように。濃霧が深いから、くれぐれも接触に注意」

おう、おう、と胸間声の返事がはねかえって、つぎつぎに選手がとびだしてゆく。応援の学生や父兄も、ほとんどがスキー持参の観戦だから、試合のまえのひと滑りにイタを担いで出てゆく。

奈美も、靴を履く人でこった返す玄関から、イタと、紅茶やサンドイッチをいれたバッグをかかえて表にでると、ちょうど乾燥室からでてきた城所太一郎といっしょになった。肩を並べて、天狗ゲレンデへ歩きます。

「早いですね、コーチ」

「うん、野沢南高の監督からポール・セットを頼まれちゃって」

野沢南高は、県内一、二を争うアルペンの名門である。上田北高としては胸を借りる形であり、こういう場合、たいがい野沢の監督がポール・セットをする。旗門の構成いかなによって、コースは難しくも易しくもなり、面白味もぐっとちがってくる。野沢の監督が、太一郎にセットを頼んだというのは、彼の競技経験を尊重すればこそであった。

「試合、どのくらいかしら」

「さあ、上位十人のうち、わが校が二人食いこめれば、まずまずだろうな。三人食いこめたら大成功」

「野沢南って、そんなに強いんですか」

「なんだって、いいスキー場を持つてゐるからな。上田だと、菅平で滑るしかないし、このスキー場じゃ回転の練習がやととで、大回転、滑降となったら、コースがとれないからお手あげだよ」

濃霧はなお、濃くなる気配だった。

除雪された道を、いま、ぞろぞろとゲレンデに向かってゐるはずなのに、前をゆく人も、うしろを来る人の姿も見えない。

